



青森県立
田名部高校

進路指導

高い志を育む面談と 若手教師の情熱で、 学校を活性化

◎町立田名部女子実業補習学校として開校。2013年度から文部科学省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校、14年度から青森県「進学力を高める高校支援事業」の指定を受けている。今年度、創立100周年を迎えた。スローガンは「未来へ放て、ラウエの光」。

設立

1917(大正6)年

形態

全日制・定時制／普通科・英語科／共学

生徒数

1学年約200人

2016年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、山形大、千葉大、電気通信大、青森公立大などに74人が合格。私立大は、青山学院大、東海大、立命館大などに延べ167人が合格。

住所

〒035-0054
青森県むつ市海老川町6-18

電話

0175-22-1184

Web Site

<http://www.tanabu-h.asn.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎生徒は真面目で素直だが、主体性に課題があった。また入試方式の適性を自覚せずに推薦・AO入試を利用する者が多かった

実践

◎ワークショップを開いて入試の適性を認識させるとともに、高い志を育む面談を徹底。英語指導力を担保する「TANABU Model」も確立

成果

◎一般入試で、最後まで頑張り抜く生徒が増加。2016年度入試では、5学級の体制以降、最高の国公立大学の合格実績を上げる

少子化、医師・教師不足 下北の課題は青森県全体の課題

下北半島北部のむつ市中心部に位置する青森県立田名部高校は、下北地方を代表する進学校の1つだ。地域の人口減少と少子化が急速に進んでおり、同校も現在は1学年5学級となった。学力層の幅は他地域の進学校に比べて広く、その中で次代の下北を担う人材を育成することが、同校の使命となっている。2016年度に赴任した三戸延聖校長はこう語る。

「下北地方は、人口の減少や少子高齢化、地元出身の医師や教師の不足など、青森県全体が抱える課題が端的に表れている地域です。下北を活性化することが、県全体の課題解決にもつながると認識しています。大学進学はその解決策の第一歩であり、下北を代表する進学校である本校の使命だと捉えています」

そうした課題を抱えながらも、16年度大学入試では、5学級となつて以降、最高の国公立大学合格者数を出した。第1志望校にこだわらず、持つて後期日程まで頑張り抜いた生徒が多く、東北大学受験者数も過去最高を記録した。

チャレンジ精神と粘り強さで実績を残した生徒たちだが、入学当初からその姿勢が身についていたわけではない。この学年以外にも言えることだが、教師の目から見るとむしろ消極的、受け身といった「線の細さ」が目立つ生徒たち

だった。同校出身で、15年度卒業生の学年主任を務めた堤孝先生は次のように振り返る。

「本校に赴任して驚いたのは、生徒がものすごく穏やかだったことです。素直でよい生徒ばかりですが、教師に与えられるのを待つ、受け身の姿勢に物足りなさを感じました。欲しいものは遠慮せず取りに行く意志の強さ、



青森県立田名部高校校長
三戸延聖 さんのへ・のぶまさ
教職歴30年。同校に赴任して1年目。
「人間万事塞翁が馬」



青森県立田名部高校
千葉栄美 ちば・えみ
教職歴27年。同校に赴任して1年目（通算12年目）。進路指導主事。「English」忙しければ忙しいほど、状況が困難であればあるほど」



青森県立田名部高校
堤孝 つつみ・たかし
教職歴22年。同校に赴任して5年目。図書主任。「化石化しない」



青森県立田名部高校
武川真樹 たけかわ・まさき
教職歴19年。同校に赴任して5年目（通算11年目）。前進路指導主事。現1学年主任。「凡事徹底」



青森県立田名部高校
市川泰斗 いちかわ・たいと
教職歴4年。同校に赴任して5年目。3学年担任。「授業を通して、数学の本当の面白さを伝えたい」

自分で道を開くたくましさを育んでいきたい
と思いました」

生徒のそうした気質が端的に表れていたのが、進路選択の場面だった。弘前大学・岩手大学の次に第3志望として東北大学を挙げる生徒や、「医療系希望」と言って看護師・理学療法士を挙げ、医師志望の気持ちを前面に出さない生徒がいたのだ。控えめな目標しか語らない生徒たちに高い目標を持たせ、隠れた力を引き出したいというのが、教師の共通の思いだった。

「推薦・AOワークショップ」で 生徒自身に適性を自覚させる

主体的な進路選択のために15年度卒業生の学年団がこだわったのは、推薦・AO入試の指導だ。同校は例年、推薦・AO入試の利用者が多く、合格率も高い。ただ、志望理由書や小論文が苦手でも、保護者の勧めもあって推薦入試に挑戦、不合格となつて調子を落とし、一般入試でも第1志望校に届かないというケースが見られた。

そこで、推薦・AO入試への向き・不向きを生徒自身に見極めさせるために、2年生12月に希望者を対象とした「推薦・AOワークショップ」を実施した。事前に、志望校の志望理由書を書いて担任に提出し、進路資料室で過去問を見ておくように指導。当日は、志望大学・学部が近い3〜4人でグループをつくり、ワークシ

ップを行った（図）。志望理由書の作成、志望校の過去問題に則した小論文の作成、そしてグループごとの模擬面接を行う。志望理由書は、ほかの生徒からのコメントや模擬面接を通しての気づきを生かして書き直し、さらに小論文も完成させて、年明けまでに保護者の捺印をもらい、担任に提出する。

その一連の活動を通して、志望理由書の作成や面接が苦手なことに気づき、早めに一般入試の準備に切り替える生徒も出てきた。また、グループ活動にすることで、自分以外の生徒の姿勢を知ることにもねらいの1つだった。

「友人は真剣に進路を考えていて、自分の

図 「推薦・AOワークショップ」(志望理由書作成の進め方)

1 志望理由書の検討

3〜4人で1グループとなり、自分以外の生徒の志望理由書を熟読。最も優れた点1つと、質問事項2つをコメント記入用紙に記入してほかの生徒に回す。次の生徒は前の人と重複しないように質問を考える。用紙は、最終的に本人に渡され、質問に答える準備をする。

2 模擬面接

1人が受験生役、ほかの生徒は面接官役になり、模擬面接を行う。最初の質問は、「本学を志望した理由をお話してください」。その後は、志望理由書に対して深く突っ込んだ質問をする。受験生役の回答が理解できなければ、理解できるまで何度も質問する。

3 志望理由書の改善

ほかの生徒からのアドバイスを基に、自分の志望理由書の改善ポイントを記入する。

*学校資料を基に編集部で作成

志望は安易だったということに気づき、志望校や入試方式について再検討する生徒がいたり、友人と切磋琢磨し、ともに合格を勝ち取った生徒もいました。生徒一人ひとりが自分自身で進むべき道を選んだことで、志望校への意欲を高く保つことができたと思います」(堤先生)

同校では、推薦入試合格者も必ずセンター試験を受験し、進学先の判定がD以下の場合、3学期の補習を必須にしている。1学年主任の武川真樹先生は言う。

「推薦入試で合格し、入学後に大学の学びについていけるのかと不安を抱える生徒もいます。そうした生徒ほど意欲的に補習に取り組むため、進学後のGPA(＊)が一般入試合格者より高い場合があります。大学で学ぶために必要な学力を生徒に身につけさせるのは、高校の責務です。生徒が胸を張って進学できるように後押ししていきます」

第1志望がE判定でも最後まで諦めさせない

15年度卒業生の学年団は、高い志を育む面談にもこだわった。安全な道を選ぶとする生徒に対して、担任が「本当にそれでよいのか」と徹底的に問いかけたのだ。担任を受け持っていた市川泰斗先生はこう振り返る。

「ある先生は厳しく、ある先生は嘸んで含めるようにと、教師の個性が出ていましたが、生徒の思いを本気で受け止める姿勢は同じでした。生徒の心を揺さぶり、自分の選択は甘くないかと自問させ、『行ける大学』ではなく『行きたい大学』にこだわる意識を持たせるように努めました」

市川先生は、経済的な事情がなければ、模試の判定がよい大学は第1志望にさせない方針を貫いた。そのため、大半の生徒は第1志望がE判定だったが、センター試験まで志望校を維持させたことで、多くの生徒が最後まで頑張り抜いた。もちろん、判定のよい大学を第1志望にさせたいという保護者もいた。

「保護者への説明では、あくまでも生徒から自分の気持ちを伝えさせるようにしました。ある生徒は泣きながら『挑戦させてほしい』と保護者に思いを伝えました。センター試験の自己採点結果では合格が厳しい状況でしたが、保護者から『頑張ってきた姿を見てるので、浪人させてでもチャレンジさせてほしい』という言葉をいただいた時は、理解し合えたと思います」(市川先生)

その生徒は第1志望で見事合格を勝ち取ったという。進路指導主事の千葉栄美先生は語る。

「以前は、経済的な事情から国公立大学が無理ならば就職するという生徒も多く、私たちも確実に合格できる国公立大学を目指す指

導をしてきました。しかし、今は奨学金制度も充実しており、本人に意欲があれば挑戦できる条件がそろっています。本気の第1志望ならリスクを取ってでも挑戦させようという姿勢が、生徒・教師・保護者の間で共有できる学校になりつつあると感じます」

よいと思えば即実行、若手教師の情熱を生かす

若手教師が存分に力を発揮できる校内環境も、同校に躍進をもたらした要因の1つだ。同校は、新卒教師の最初の赴任校、あるいは若手教師の2番目の赴任校となることが多い。事実、同校の教師の平均年齢は35歳を切っている。

「若手教師は経験面でベテラン教師に劣ると思われがちですが、その若さこそが本校の強みです。若手教師のやる気や情熱をベテラン教師が受け止め、積極的にチャレンジさせています。そうした若手教師の情熱が生徒たちにも伝わったことが、生徒の意欲的な進路選択にも好影響を及ぼしたと感じています」(堤先生)

15年度、3年生の夏合宿を初めて実施したが、それは若手教師の発案だった。予算や人的配置の点で容易な取り組みではなかったが、進路指導部が積極的に動いて実現させた。

また、若手教師を積極的に県内外の先進校視

＊ Grade Point Average の略。各科目の成績を数値化して算出する学生の単位あたりの成績評価値のこと。

察に赴かせ、ノウハウを吸収させている。持ち帰ったノウハウは職員会議で共有し、よいと思った取り組みはすぐ実行に移しているという。

「TANABU Model」で英語指導の質を担保

教科指導では、5年前から協働学習の研修を行い、アクティブ・ラーニングを国語、数学、英語で順次取り入れてきた。その牽引役の1つが英語だ。13年度に文部科学省「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校の指定を受け、教科指導力の向上、質の担保のための「持続可能なコミュニケーション英語の授業モデル…TANABU Model 2013」を構築した。

その特徴は、コミュニケーション活動の時間を確保するために、レッスンの内容に応じて時間に幅を持たせている点だ。2・4・10・15時間の4パターンがあり、例えば、2時間の授業では、1時間目に1レッスンの読解力診断テストを行い、その自己採点をした上で、後半1時間で語彙・表現の定着を図る。10時間の授業では、内容理解、語彙・表現の定着活動、音読、ディクテーションなどを行い、最後にストーリー・リプロダクションを実施する。15時間の授業では、最後にパフォーマンステスト（1年生はロールプレイ、2年生はディベート、3年生

はプレゼンテーション）を行う。

「各レッスンは同じワークシートを使って指導するため、初任の教師でもほぼ同じ形式・質の授業が可能です。生徒はコミュニケーション能力の向上はもちろん、英語に触れるとまず内容を捉えようとする姿勢が身につきました。ベテランの教師も『授業が進めやすくなった』と言っています」（堤先生）

「最初の1年間で、ある程度の成果が出たので、どの教科書にも『TANABU Model』が適応できるのかを確かめるために、14・15年度は教科書を変え、レッスンごとのワークシートをすべて作り直しました。16年

度の2年生では、1年生4月のスタディーサポートの英語の結果が過去5年間で最も低かったのですが、1月の進研模試は5年間で最もよい結果が出て、本モデルが持続可能なものであることを実証できました」（武川先生）

高い目標を持たせる指導、若手教師の活用などで実績を上げている田名部高校。今後の課題は増え続ける仕事量の精選だと、千葉先生は言う。

「先生方が生徒に一生懸命手をかけてきたことが今の実績に結びついていますが、手を離すべきところを見極めて、取り組みを精選することで、教師の多忙化を軽減する余地はあります。内容をさらに精査し、成果を出し続けるシステムを構築したいと思います」

情熱 若手教師が語る、指導変革への

提案が会議で受け入れられたことが自信につながった

3学年担任 市川泰斗

教師になって4年間、本校に勤務して感じるの、アイデアを即実行に移せる風通しのよさです。赴任した最初の年は、進路指導部の業務に慣れるのに必死で、会議でも新人はあまり発言しない方がよいと思い、自分らしい提案はできませんでした。

自分らしさを出せるようになったのは、初めて担任を持った2年目。学年主任を始め、ベテランの先生方に「もっと発言してよいよ」と言われたのがきっかけです。私自身、「総合的な学習の時間」や進路学習の進め方など、1年間の経験で課題に感じていたことがありました。それを会議で提案したところ、すぐに受け入れられたことが大きな自信になりました。

模試では、クラスの大半の生徒が第1志望でE判定でしたが、「それがあたり前で、諦めずに頑張る」という雰囲気を最後まで保てたのがよかったと思います。状況が厳しくても、私よりも強気な生徒が多く、逆に私の方が励まされました。

2016年度は、前年度に続き3年生の担任となりました。1年生から指導してきた生徒たちではないので、まずは現状把握から始め、これまでの指導の反省を踏まえて、様々な手を打ちたいと考えています。進路指導では、第1志望だけでなく、第2・3志望の大学についてももしっかり考えさせること、授業では、数学の本質まで深く理解させることを追求していきたいと思っています。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。

2015年4月号指導変革の軌跡「大阪府立芥川高校」など

▶▶▶ <http://berd.benesse.jp> → HOME > 教育情報 > 高校向け